



性的多様性と教育

川村学園女子大学
教育学部 准教授
山口恭平さん

2025年10月取材
川村学園女子大学我孫子キャンパスにて

多様な性のあり方について、我孫子市の川村学園女子大学を訪ね、山口恭平（やまぐちきょうへい）准教授に話を聞きました。

山口さんの専門は教育哲学・教育思想史です。関連する言葉の説明とともに、歴史や教育現場の課題など、幅広く話してもらいました。

（所属・肩書等は2025年10月取材時のもの）



主な著作

「川村女学院と大正新教育」

『近代日本教育史と川村学園』（ゆまに書房、2024年）所収

「J.バトラーにおける『政治教育』」

『研究室紀要』第42号（東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室、2016年）所収

セクシュアリティとは

セクシュアリティ（sexuality）という言葉は今日、少しずつ浸透してきているように見えますが、どうでしょうか。漠然と性を表すものと思っても、いろいろな意味合いが含まれるようで、わかりにくいと感じる人が多いかもしれません。学者の間でも定義しづらいとされています。

私は、セクシュアリティを「性の意識・興味など人間の性のあり方全般を指す言葉。性におけるその人らしさ」と説明しています。

セクシュアリティに関連する言葉はいろいろあります（左下図）。LGBT、LGBTQ、セクシュアル・マイノリティ（性的少数者）は、耳にする機会が時々あるのでは。中でもLGBTは、比較的人々の間に行き渡ってきているかと思います。

セクシュアリティに関する語彙

- **LGBT**・・・Lesbian/Gay/Bisexual/Transgender
- **LGBTQ**・・・LGBTに加えQueer or Questioning
- **シスジェンダー**・・・トランスジェンダーの人に対して、生まれ持った性別と性自認が一致している人
- **セクシュアル・マイノリティ**（性的少数者）
- **SOGI**・・・性的指向と性自認
（Sexual Orientation and Gender Identity）

山口恭平「性的多様性と教育」（講演資料）から

セクシュアリティの歴史.....

セクシュアル・マイノリティが社会の中でどのように位置づけられてきたのか。また、どんな努力をしてきたのか。その歴史をたどってみましょう。社会に対する訴えの軸が変遷していく過程が見られます。性に対するアイデンティティ（自己認識）を同じくする人たちがその存在意義を認めてもらおうという運動に始まり、性のあり方より複雑な実情に対応したクィア（Queer）という考え方に至るというものです。

アイデンティティを力に

発端は1969年にアメリカで起こったストーンウォール暴動です。1960年代には公民権運動が起こり、セクシュアル・マイ

ノリティの社会的環境が改善された部分もありましたが、なお抑圧的な状況にあったのです。警察官がニューヨーク市のゲイバー「ストーンウォール・イン」に6月27日、踏み込み捜査を行いました。これに対し居合わせた同性愛者たちが応戦し、3日間にわたって立てこもりました。従来からこうした立ち入りはありましたが、彼らは侮蔑的な扱いを受けても抵抗することはありませんでした。しかし、この日はついに警察官を追い出すに及びました。これがストーンウォール暴動です。

以前からセクシュアル・マイノリティの人権を訴える組織はありました。しかし、それらは同性愛者本人たちのものでありながら、同性愛に関心を持つ人々のものとい

前ページ下図の用語解説

LGBTはレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル（両性愛者）、トランスジェンダーの頭文字をとった言葉で、これら**セクシュアル・マイノリティ**を総称するものです。トランスジェンダーは生まれた時に割り当てられた性別と自分が認識している性別が一致していない人で、一致している人は**シスジェンダー**です。最近では、**LGBTQ**、さらに**LGBTQ+**（プラス）という表記が増えています。Qや+には、LGBTだけではない、もっと多様な性のあり方があるという意味が込められています。

SOGI（ソジ、Sexual Orientation and

Gender Identity）は「性的指向と性自認」です。性的指向とはどのような性別の人を好きになるか、性自認とは自分の性をどのように認識しているかということです。性的指向を「好きになる性」、性自認を「心の性」と言うこともあります。性自認が男性で女性を好きになる、あるいは、性自認が女性で男性を好きになる人がセクシュアル・マジョリティ（性的多数者）、そこに属さないSOGIを持つ人がセクシュアル・マイノリティ（性的少数者）。人々はいずれかに属するという事です。後者は、少数であるがゆえに社会の中で様々な差別や偏見にさらされてきました。



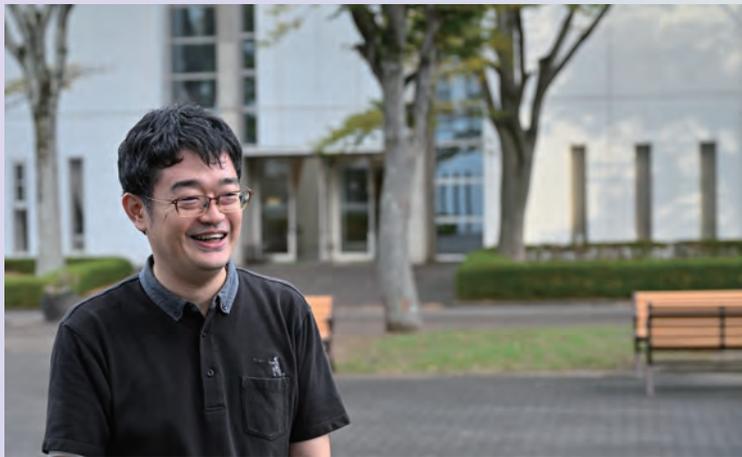
う外見を装っていました。保守的な社会に同調しなければならなかったのです。この暴動以降、性に対するアイデンティティを共有する人たちによって行われる解放運動が主流になっていきます。まさに「異性愛者に受け入れられやすいセクシュアル・マイノリティ」から、「自分たちの権利を主張し、闘うセクシュアル・マイノリティ」への転換点となった暴動でした。これがその後、いわゆる「プライド・パレード」へとつながっていきます。今では暴動が起こった6月下旬に合わせ、日本も含めて世界中でこうしたパレードが催されています。

1970年代になると、運動を通してセクシュアル・マイノリティの存在が社会の表に出るようになり（可視化）、セクシュア

ル・マイノリティの集団の権利獲得も進んでいきます。一方、それに連れて、集団の内部には個々のレベルで様々な違いがあることが表面化してきました。例えば、集団の中で人種による力関係が生まれるなど。アイデンティティを共有しているように見えても、実際には一枚岩となる難しさが浮き彫りになってきたのです。

自らをクィアと称して

集団の中での違いは人種などの属性だけにとどまりません。例えば、一口に同性愛者と言っても、自己の性に対する認識は複雑で、このくくりの中にみんながみんな、すんなりと納まるものではない。これらの点が明らかになると、解放運動にも変化が見られるようになりました。



すなわち、アイデンティティに基づかない活動の軸が必要。そこに出てきたのがクィアという考え方です。

クィアとは「変態」といった意味に近く、もともとセクシュアル・マイノリティへの侮蔑が込められています。それを自分たちが使うというわけです。自らをクィアと称することは自分をさげすむのではなく、そんな言葉に自分たちは傷つかないと表明することです。クィアという考え方に基づき、解放運動は「自分たちは普通でないかもしれない。しかし、権利は普通とされる人々と同等に認められるべき」という流れになっていきます。異性愛こそが「自然」で「普通」であるというのは、ずっと続いてきた社会の「規範」でした。どうしてか。社会にはそういう規範を生み出した権力構造があるはずだ。そこが問題だとしたわけです。セクシュアリティに限らず、ジェンダーもそうですが、様々な不平等が規範によってつくられています。自然とされるものは、実は社会によって構築されたものだという事です。

セクシュアル・マイノリティは、レズビアンやゲイといったように分類・整理して語られるのが一般です。つまり、あるカテゴリーの中に置かれるわけです。ところが、そういうカテゴリーの中にも無数の差異がある。さらには、性自認や性的指向が一つのカテゴリーに当てはまらなかったり、複数のカテゴリーをまたいだりする場合もあります。性のありようはグラデーション（色などが段階的・連続的に変化していく表現方法）のようです。また、それほど安定したものでもなく、時が経てば変化することもあります。クィアはそういう本当に様々な性のあり方を包括する概念です。広く人々に対して性的指向や性自認がどれほど多様かという認識を促す願いが、この言葉には宿されています。

なお、クィアという考え方に大きな影響を与えたとされるのがアメリカの哲学者、ジュディス・バトラー（1956年～）の著書『ジェンダー・トラブル』（1990年）です。その思想には私も関心を持っており、それは教育にとっても大事なことと考えています。

教育の現場では.....

今では小学校の教科書でも性的多様性が取り扱われるようになりました。その内容をいくつか見ていきましょう。

まず、5・6年生のある保健の教科書（2019年）です。「寄り添うことの大切さ」というコラムがありました。生まれた性別と心の性別が一致しないことで不安や悩みを持っている人がいることを理解し、寄り添ってあげましょうという趣旨のものです。

この書きぶりだと、すべての生徒がセクシュアル・マジョリティの中にいることを前提にしているように見えてしまいます。マイノリティが不快感を抱いたり傷ついたりすることもあるのではないかと。例えば、「私はLGBTではないが、LGBTのことを理解しよう」という発言があったとします。これを聞いたLGBTの人は、「マジョリティ側は上から目線で、同等に見ていな

い」というニュアンスを発言の中に感じるのではないかと。マジョリティがマイノリティを理解するのは、もちろん大事なことです。他方、マイノリティの側では、「理解してもらわなくて結構、寄り添ってもらいたいわけではない」という人もいますでしょう。

「好きな異性がいるのは自然のこと」という項目を設けた道徳の教材（『私たちの道徳 中学校』）があります。一般には、この見出しは子どもの性の芽生えを表現するものと解釈されるでしょう。好きな女の子ができた男の子は、自分の心身の変化に対する迷いや不安を和らげられて、すんなりとこの教材に入っていけるでしょう。性に関する正しい知識や道徳を学んでいくということです。しかし、好きな女の子がいなかったり、好きな同性がいたりする男の子はどうでしょう。自然ではない子に分類されてしまう。「自然のこと」というカテゴリーに属さないのです。自分はみんなと違うんだ。学校にはいられない。そう感じ取ったとしても不思議ではないでしょう。

上の例を見ても、教育の現場では特徴や種類で仕分けをする傾向、つまりカテゴリー的な考え方がまだまだ根強いと感じます。「自分らしさを尊重しよう」と教えられることもあるのですが、多様な性に対して包括的に着目するクィア的な発想は、なお足りないと感じています。



自分を見つめ直す.....

人が本来的に持つ性に対する指向・嗜好や特徴にはそれぞれに違いがあります。そのありようを突き詰めていくと、実は連続的であって、まさに「性はグラデーション」と言えるものです。しかし、人々が陥りがちな思考は、「ノーマル／アブノーマル」という区分です。こう整理することによって、自分の属する場所が明確になり安心できるからでしょうか。「自分はノーマル、異なる他者はアブノーマル」というカテゴリー分け。これが問題含みだとすれば、この隔てによって優越性を持ちたいと思ってしまうこと。意識面では差別を招き、社会的にはマジョリティ側の特権性を強調し温存するという企てにつながりかねません。

そもそも差別とは何であるのか、理解を深める。どのようにして差別が生まれ存続していくのか、きちんとその現実を知る。差別してはいけないとお題目を唱えるだけでは意味がありません。この状況をどうにかしなくてはいけないと考える方向に持っていくことが大切です。もしかしたら自分も何がしかの規範を生み出しているかもしれないという意識をしっかりと持つこと。ここに教育の関与できるところがあるのではないかと考えています。

「性的多様性と教育」というテーマでは、どうしてもLGBTQとの結びつきで語られがちです。当然それは重要なことですが、性のあり方を幅広く捉えるならば、教

育は単にLGBTQという範疇にとどめるものではないと思います。現場では、例えば生理の問題などを含めて、性についてもっと語りやすくなれば、誰もが生きやすい世の中になるのかもしれませんが。

取材後に感じたこと ～「リアクションペーパー（※）」風に～

2025年10月

自分の中にもカテゴリー的なもの見方があると感じました。無意識のうちに「普通、〇〇じゃない?」「〇〇とする方が自然じゃない?」と、言ってしまうことは多々あります。自分がマジョリティ側に立ち、相手をマイノリティ側にカテゴライズしているからでしょうか。逆に自分が言われると、受け流しながらも心の中で「私は普通じゃないの?」とモヤモヤすることもあります。

マイノリティの側面は、実は誰にでも一つや二つはあるのではないかと思いました。例えば、初対面の時など会話の糸口として「ご出身は?」と聞くことがあります。それは、出身地が「誰にでもあるもの」ということを前提にはしていないでしょうか。自分は子どもの頃は引っ越しが多かったので、これには明確な答えが見当たりません。

自分自身を基準にしたり世の中の大勢としたりして発した言葉が、相手にはどう受け止められるのか、ふと立ち止まって考えてみることも必要だと思いました。

(※)リアクションペーパーとは、大学の講義の後、学生が授業内容への感想や意見などを記入して提出する用紙のこと。

